

日本グループ・ダイナミクス学会会報

ぐるだい

JGDA  
ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/index.php>第38号  
(2011年1月7日)発行所：〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1  
広島大学大学院総合科学研究科行動科学講座 浦光博研究室  
日本グループ・ダイナミクス学会  
e-mail: [sec-general@groupdynamics.gr.jp](mailto:sec-general@groupdynamics.gr.jp)  
発行人：浦 光博, 編集担当：西田 公昭

## 《 目 次 》

- § 第57回大会 (於 東京国際大学) のご報告 …………… 1  
★第57回大会後記：角山 剛
- § 本年度優秀論文賞決定 …………… 2  
★優秀論文賞選考経過と結果の報告：山口裕幸  
★受賞者の声：宮本 匠・渥美公秀／中谷内一也・野波 寛・加藤潤三
- § 第4回『優秀学会発表賞』決定 …………… 4  
★選考経過と結果の報告 相川 充  
★受賞者の声：五十嵐 祐／渡辺 匠／縄田健吾
- § グルダイ学会大会体験記 …………… 7  
油尾聡子／小玉一樹／小森めぐみ
- § 国際学会大会参加報告 …………… 9  
★ICAP2010参加報告：三沢 良／藤村まこと
- § 社会心理学者かくつばやけり：ツイッターに関する論考…………… 10  
★第2回 研究者としての観点からツイッターを眺める 三浦麻子
- § 常任理事会からのお知らせとお願い…………… 12  
★2011年度アジア社会心理学会発表支援制度補助対象者募集のお知らせ
- § 事務局からのお知らせとお願い／広報担当からのお知らせ／諸連絡先 …… 13

## ★★ 第57回大会 (於 東京国際大学) のご報告 ★★

## 第57回大会後記

大会準備委員長 角山 剛 (東京国際大学)

8月27・28日にわたり開催いたしました第57回は、2日間で延べ300人近くのご参加をいただき、盛況のうちに終えることができました。

開催校の依頼をいただきお引き受けしたものの、教員スタッフが少ない上に大会委員長は名ばかりで動きが鈍く、大会事務局長がゼミ生を指揮して、ほとんど孤軍奮闘状態での準備でした。幸い、非常勤でおいでいただいている先生や大学院生、OB、学部学生の協力を得て、8月に入ってから急ピッチで準備が進み、当日に間に合わせることができました。



大会中は好天に恵まれすぎて、両日とも気温35度という猛暑。ご参加の皆さんの体調はもちろんのこと、駅周辺や外回りを担当している学生スタッフもこまめに交替させるなど、熱中症対策にも気を配った二日間でした。

毎年の大会主催校でもご苦労なされたことと思いますが、総会出席者数の見積もりが難しく、用意した弁当がスタッフの分を除いても結局40ほど余ってしまいました。元気のいい学生スタッフたちが2つめに手を伸ばしてくれましたが、炎暑の中で最終的に廃棄処分とせざるをえなかった手つかずの弁当に、心の痛む思いでした。せっかく出席して下さった会員の皆さんに食事が行き渡らないということのないよう、riskyな方向よりもcautiousな方向で個数を見積もったのですが、大会委員長の判断ミスが出てしまい、大いに反省しています。(懇親会で川越の芋焼酎を用意し忘れたのも、大会委員長の痛恨のミスでした。)

両日ともに発表の場に出席することはほとんどできなかったのですが、ポスター発表会場ではあちこちで活発な討論の輪ができていているのを見ることができ、また、どのセッション会場も充実した内容であったとのことをうかがい、安心しました。

もう一つ、今回の大会では当日参加の方が多くいらっしゃり、受付でスタッフ学生たちが懸命に対応したのですが登録処理に時間がかかってしまい、ご迷惑をおかけすることになりました。こちらはうれしい誤算でしたが、駅から暑い中をおいでいただいた上にお待ちいただいた方々には、あらためてお詫び申し上げます。

学部学生スタッフたちは、全員が学会大会は初めての経験でした。運営を手伝う中で学会の雰囲気になんとも触れることができ、また論文集を手にとって研究の多彩さを感じることができ、彼ら彼女らの今後の勉学にも大いに刺激になったことと思います。学生生活の中でもよい思い出として残ることでしょう。

いろいろハプニングもあり、バタバタと対応に追われて行き届かない点も多々あったことと思いますが、終わりよければすべてよしということで、どうかご寛恕下さい。大会運営に携わりました一同を代表して、あらためて御礼申し上げます。



## ★★ 本年度優秀論文賞決定 ★★

### ☆☆ 優秀論文賞選考の経過と結果の報告 ☆☆

機関誌編集担当常任理事 山口 裕幸 (九州大学)

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第49巻1号及び2号に掲載された全論文(原著、資料)17本のうち、選考規定により授賞対象とならない論文1編を除く16編でした。7月5日に編集委員全員に選考依頼を行い、優秀と考えられる論文3編を選び、1位から3位まで順位をつけて、8月18日を締め切りとして投票をお願いしました。

19名の編集委員から投票が届き、編集事務局(九州大学大学院人間環境学研究院)にて開票を行い、規程に従って、1位票に3点、2位票に2点、3位票に1点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、8月27日18時より優秀論文選考委員会を開催して協議した結果、以下の論文に今年度の本学会優秀論文賞を授与することを決定しました。

宮本 匠・渥美 公秀 (著)

「災害復興における物語と外部支援者の役割について～新潟潟県中越地震の事例から～」

(第49巻1号 Pp17-31)

中谷内 一也・野波 寛・加藤 潤三 (著)

「沖縄赤土流出問題における一般住民と被害者住民の信頼比較リスク管理組織への信頼規定因と政策受容」

(第49巻2号 Pp205-216)

なお、大会の総会において、この結果を報告し、授賞式を行いました。宮本先生、渥美先生、中谷内先生、野波先生、加藤先生おめでとうございます。今後、益々のご研究の発展をお祈り申し上げます。

\*\*\*\*\*

### ★☆☆ 受賞者の声 ☆☆☆

#### ◇ 宮本 匠・渥美公秀 (大阪大学) : 執筆 宮本 匠

この度は優秀論文賞を賜り、誠にありがとうございました。身に余る賞を頂き、正直なところ恐縮しております。論文を書き上げるにあたり貴重なコメントを下された主査・副査の先生方、研究室のみなさま、そして私のフィールドワークを支え励ましてくださった友人・家族、中越地震被災地で出会ったみなさま、そして何より川口町木沢集落のみなさまおひとりおひとりに改めて感謝申し上げます。



本論文は、新潟県中越地震の被災地である川口町(現長岡市)木沢集落をフィールドに、災害復興における目標が、実際に被災した地域の中でどのように生まれ、共有されていくのかについて、ナラティブの協働構築とそこにおける外部支援者の役割という観点から考察したものです。私が大学の学部4年生の時に現地に住み込んで、地震後に設立された民間の中間支援組織である中越復興市民会議の一員として集落の復興支援に関わる中で書きあげたエスノグラフィーが下敷きとなっています。今あらためて読みかえせば、



負った表現や、問いや考察の未熟さに気恥ずかしい部分もありますが、同時に、自分が借りた畑から眺めた越後三山の姿、雨上がりの土の匂い、山歩きのとくに教えてもらったザゼンソウ、一口飲めばすぐにまた満たされた昼のお茶のみと夜のお酒、そして村の人のやるせない思い、ためらい、それらが尽きることなく思われます。そして、自分はその頃に出会った問いや声や想いに、どれだけ向き合っただろうかと、あらためて自分自身が問われているような気がします。

中越地震から6年がたちました。あれから木沢集落では紆余曲折を経て、地震前に廃校になっていた小学校が、外部の人との体験交流の拠点として「やまぼうし」という名前の宿泊施設として動き出しました。また地域に住んでいる自分たち自身が、一番自分たちのことを知らないのではないかと「木沢学」なる取り組みも始まりました。行政区ではない、文化区の復興をと、「二十村郷盆踊り」という近隣集落との交流も復活しました。そして、新しく生まれたものがある一方で、失われたものもたくさんありました。これらの結果を引きうけていかれるのは地域の方たちです。そこに人ごとでなく、自分の問題としてどのように向き合っていけるのか、そんな気持ちをもって一人称でエスノグラフィーを書いたつもりでしたが、今後の研究の中でも大切な主題として胸にとどめたいと思います。

私は現在、アメリカ合衆国のデラウェア大学にあるDisaster Research Centerで研究を進めています。既存の社会における課題を被災後の地域において実践的に研究を進める災害復興の人間科学を、幅広い視野とフィールドの中で考えていきたいと思っています。

最後に、もう一度感謝申し上げますとともに、今後の研究にもご指導をどうぞよろしくお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

中谷内 一也 (同志社大学) ・野波 寛 (関西学院大学) ・加藤 潤三 (琉球大学) : 執筆 野波 寛



沖縄県の赤土流出問題は (論文中にも少し記述したが)、1972年の沖縄返還の頃から始まり、'75年の沖縄国際海洋博覧会あたりから激化したとされる。それ以前からあった問題なのかもしれないが、私たちが沖縄本島で調査をしたときには、地元の方々はたいてい口をそろえて「海洋博の頃からひどくなった」と言っておられた。年代と経緯から見れば、赤土流出問題は沖縄という小さな島が本土(ヤマト)の高度経済成長の余波を受けて発生したとも言えるだろう。

紺碧のサンゴ礁というイメージは沖縄の重要な産業である観光業の、そのまた大切な柱だから、海の汚濁につながる赤土流出は沖縄の死活問題である。自治体も手をこまねいてはおられず、赤土等流出防止条例の制定など策を打ち、それなりの成果をあげてきた。しかしこの問題には、自治体の取り組みだけではなかなか解決しづらい部分もある。造成事業などには赤土流出の防止に向けた一定の規制をかけることができても、畑地からの流出を止めるために農家の方々にまで規制を押しつけることはできない。米軍基地からの赤土流出にも手が出せない。こういった、自治体としては正面きっての取り組みがむずかしい要因が、現在も続く赤土流出となって現れているわけである。



私たちがインタビューをさせていただいたいくつかの村の方々には、農家の方であれ漁家の方であれ行政の方であれ、みんな「私たちの村の海を守りたい」との強い思いを吐露してくれた。「海を守りたい」ではなく、「私たちの村の海」であることに注目。海に直接かわりのある漁家のみならず、農家の方も行政の方も、海を自分たちの住む地域の大切な一部として取り入れている。インタビューを行ったとある建物のテラスから広がっていた、水平線が空に溶けていきそうな真っ青な海は今も私たちの目に鮮やかに残る。しかし、すこし場所を移してみると、赤土の泥に埋まって窒息しかけている干潟。この2つの間で、それぞれの立場から取り組みを模索する農家・漁家・行政の方々の苦悩には、「研究」や「調査」という視点だけでは語るこのできない重さがあった。

では語るこのできない重さがあった。

同じ沖縄でも都市部で私たちが調査を行ってみると、危険だからと子どもたちは海から遠ざけられ、「海を見たことがない」という小学生も少なからずいることが浮かび上がる。国と住民との間に立つ自治体行政マンの悩み、海をめぐる多様な人々の協力が困難になりがちなものかき、都市と農村との乖離—私たちは沖縄で、こうした事例をほんの少し、垣間見せてもらった。

私たちは、沖縄での研究を今後もっと続けるつもりでいる。空と海と風と気さくな人々と、そして泡盛—調査へ行くたびにいつも、調査どころかこちらが癒されてしまう沖縄に、少しでも恩返しをさせていただきたい。沖縄が向き合っている問題に、私たちも向き合わせてもらいたい。今はそんな思いである。末尾になるが、私たちの研究を後押ししてくれた沖縄のすべての方々に、この場を借りてお礼を申し上げる次第である。

## ★★ 第4回『優秀学会発表賞』決定 ★★

### 優秀学会発表賞の選考経過と選考結果の報告

第57回大会選考委員長 相川 充 (東京学芸大学)

2010年8月28日から8月29日に、東京国際大学で開催された日本グループ・ダイナミクス学会第57回大会において、「優秀学会発表賞」の選考が行われました。本賞は、規定により「第1著者である発表者が、発表時点において大学院在学中の者、または大学院修了後(退学後)5年以内」の会員の研究を奨励する目的で設けられた学会賞です。

以下に、今回の選考経過ならびに選考結果の概略をご報告いたします。

### 1. エントリーの受付

本賞の授与を希望する発表者は、大会発表申し込みの際、自らエントリーしました。エントリー総数は36本でした。この中に、発表資格の規定上、発表資格がないものが1本含まれていました。当人に確認をとってから本賞の対象から除外しました。その結果、事前投票の対象となった発表総数は35本です。

### 2. 事前投票

事前投票は、7月初めから8月上旬にかけて、発表論文集の原稿を対象として行われました。選考委員は、理事19名が担当し、18名から回答がありました。

各選考委員は、受賞に該当すると思われる発表3本以内（「該当なし」も含む）を選びました。集計の結果、それぞれの部門において得票数が多かった順に上位3つ、計12本の発表が当日審査に進みました。

### 3. 発表審査

発表審査は、事前投票で選ばれた12本の発表に対して、大会期間中に行われました。1つの発表に対して3人の選考委員が、「発表内容」と「プレゼンテーションの仕方」の2つの観点から5段階で評価を行いました。

### 4. 受賞発表の決定

最終集計は、事前投票と当日審査の結果を合わせて行いました。その結果、部門ごとに最高点を獲得した下記の発表を選考委員会での審議を経て、第57回大会の優秀学会発表賞としました。

なお、ロング・スピーチ部門に関しては、事前審査のあと常任理事で審議し、また当日審査のあと選考委員同士で合議し、さらに常任理事会でも検討しましたが、今回は「該当なし」に決定いたしました。

#### 【ショート・スピーチ部門】

##### ● 五十嵐 祐

高信頼者の対人関係選択のダイナミックス：行為者指向型ネットワーク選択モデルによる「見極め」能力の検討

#### 【ロング・スピーチ部門】

該当なし

#### 【English Session部門】

##### ● Takumi WATANABE & Kaori KARASAWA

Implicit Group Identification in the Face of Mortality Salience

#### 【ポスター部門】

##### ● 縄田 健悟・山口裕幸

外国人犯罪報道への接触と報復的差別

受賞者は、受賞した発表に関する論文を第1著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有します。すなわち、「特集論文」に準じて、主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は、学会の広報（速報）メールマガジンである「グルダイメールマガジン(JGDA\_Flash)」での受賞発表日（2010年9月11日）から1年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は、2011年9月11日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

\*\*\*\*\*

★☆☆ 受賞者の声 ☆☆☆

◇ ショート・スピーチ部門：

**五十嵐 祐 (北海学園大学)**



このたびは、ショート・スピーチ部門で優秀学会発表賞をいただくことができ、大変うれしく思います。個人的には「川越の夏は暑い」という記憶がまず思い起こされる学会でしたが、このような形で記録にも残る学会となり、とても光栄です。

さて、本発表では、一般的信頼の高い行為者（高信頼者）が他者の信頼感を見極めた上で対人関係を選択しているかどうかを、4時点で測定された縦断データに基づく社会的ネットワークのダイナミックスの分析を通じて検討しました。行為者指向型ネットワーク選択モデルを用いた分析の結果、高信頼者は、弱いつながりを持つ社会的ネットワークにおいて見極め能力を発揮し、一般的信頼が高い

相手との関係を選択的に形成することが示され、高信頼者の信頼の見極め能力が実験室場面だけでなく、実際の対人選択場面でも見られることが明らかとなりました。

この発表で分析したデータは、今は昔、大学院生のときに収集したものです。社会的ネットワークの分析については留学時代はかなり試行錯誤したものの、それでも「これだ!」といった結果が出ず、ずっともやもやしたままでした。それでも時間のある時にこつこつと分析を重ね、かれこれ7年ほどかけてようやく日の目を見た、私にとってはとても愛着のあるデータです。「継続は力なり」とはよく言ったもので、ここ数年のハードウェアの進歩や分析ソフトウェアの充実によって、プログラムが動かない、計算が終わらないといった苦勞はほとんどなくなりました。そして、地道にひとつのテーマを掘り下げることの大切さを改めて学ぶことができました。

冬を迎えた北の大地では、夜は長く、一日は短い…という毎日の繰り返しで、ゆっくりと研究について考えることもなかなかままなりません。専門家の集まる学会という場で自分の発表を評価していただけたことは、これからの研究生活において大きな励みとなります。最後になりますが、審査員の先生方、発表を聞いてくださったみなさまに、心より感謝申し上げます。

\*\*\*\*\*

◇ English Session

**渡辺 匠 (東京大学大学院人文社会系研究科)**

この度は優秀学会発表賞をいただき、誠にありがとうございます。発表に際して、審査をしていただいた先生方、ご質問やご指導いただきました先生方に心より御礼申し上げます。本研究は存在脅威管理理論の観点から、自己と内集団の概念表象の連合について検討したものです。具体的には、死が顕現化されると自己と内集団の連合が強くなることを実験的に示しています。

学会での英語の口頭発表は今回が2回目でしたが、事前に研究会等で英語発表を行ったことにより、普段より落ち着いて発表することができたのかなと感じています。

このセッションの特徴として、社会心理学の中の個別の研究領域に特化せずに、様々なテーマを持った研究者の方々が発表を行うという点が挙げられると思います。今回の研究は社会的認知の領域の中でも反応時間パラダイムを使用していて、分野が異なる人（同じ場合でも...）には非常に理解しにくいいため、自分で分析していても、使用した方法論の枠内で細かい点が気になるのですが、別の広い観点からご指摘をいただいたことで、自分の研究の方向性や解釈について再考察する機会が得られ、大変ありがたく感じています。

最後に、本研究の実施に際して、多くの方からのご協力をいただきました。特に、唐沢かおり先生には指導教員として、本研究の計画・遂行にあたり、終始ご指導をいただきました。この場をお借りして、深く感謝の意を申し上げます。また、発表前日に練習につきあっていただいた橋本剛明氏、研究内外でご支援くださった白岩祐子氏の両先輩方に厚く感謝申し上げます。ありがとうございました。



\*\*\*\*\*

◇ ポスター部門：

**縄田健吾 (九州大学)**

この度は優秀学会発表賞を頂き、大変光栄に存じます。本発表を審査して下さった先生方や、当日の発表の際に有益なコメントを下さった先生方に、心より御礼を申し上げます。

本発表は、私が大学院に進学して以来ずっと研究しております、集団間代理報復の枠組みを援用して、外国人犯罪報道への接触と外国人差別の関係を捉えようとした研究です。集団間代理報復とは、内集団成員が外集団成員から危害を受けたときに、被害者本人ではない内集団成員が、加害者本人ではない外集団成員に対して集団間報復を行うという現象です。この枠組みを援用して、外国人犯罪報道へと接触すると、同様に「代理報復」が見られるのではないかと考えました。すなわち、日本人が外国人によって犯罪被害を受けたと知ることによって、日本人全体が怒りを覚え、そして犯人出身国の国民一般に対して、報復的な差別を行うだろうという予測を立てました。方法としては、外国人犯罪報道場面の記事を読んでもらう質問紙実験を行いました。

結果としては、予測どおり、外国人犯罪の報道記事を読むことで、犯人出身国の国民一般への報復的差別は強くなりました。その一方で、その心理過程全てが当初の予測通りとなったわけではありませんでした。走り始めたばかりの研究であるがために、まだ理論的にも方法論的にも改善の余地が多く残されています。このような荒削りな研究を評価していただいたことは、今後ともしっかりとやるようにと、審査の先生方に背中を押していただいたつもりでおります。まだまだ未熟な身ではございますが、この受賞を励みに、今後とも研究に精進して参りたいと思います。

### ★★ グルダイ学会大会体験記 ★★

グルダイ学会大会に参加・発表された方、そしてスタッフをされた方に体験記をいただきました。お読みいただき、「自分もあの頃はこんなだったなあ」と、回想いただくもよし、「いや、私は違ったなあ」と考えていただくもよし、「若手の方たちはこんな風に感じていたのか」と思うもよし・・・是非ご覧ください。

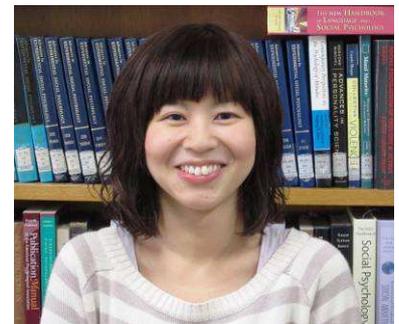
◇ グルダイ学会大会「学生」体験記

**油尾聡子 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科・日本学術振興会)**

私が本大会に参加したのは、今回で3回目です(学部4年のときにスタッフとして見届けたのを含めると4回目です)。昨年の初々しい“初体験記”を目にしておりましたので、まさか私に体験記の執筆依頼が来るとは思っていませんでした。しかし、包帯でぐるぐる巻きになった古谷先生の右腕を見て、「これをお断りして、左腕にも包帯が巻かれるようになったら、私の責任だ」と思い、決死の覚悟でお引き受けいたしました。

さて、本大会では、例年のことながら、多くの知的刺激を得ることができました。私は、今回、ポスター発表をさせていただきました。そして、立ち寄っていただいた先生方から、さまざまな貴重なコメントをいただきました。時折厳しいご指摘もあり、思わず心が折れそうにもなりました。ですが、そのご指摘のおかげで、問題点を整理し、まとめあげていく方法が見えてきました。ご指摘くださいました先生方、ありがとうございました。学会発表では、ゼミ発表とは異なる新たな視点からのご指摘や、応用可能性、そして励ましのお言葉を頂戴できるので(自尊心の低い私には非常にありがたいです)、終わった後には、いつも大きなおみやげを持って帰れた気持ちになります。

また、他の先生方のご発表を聞き、議論を重ねることも、学会における楽しみの一つです。データを取るのに味わった苦労や、研究者自身の当初の意図など、論文の裏側を垣間見ることができるのも、学会発表の



醍醐味だと思います。本大会でも、それらを十分に味わうことができました。

今回の大会は、例年よりも発表数が少なかったようですが、その分、一つ一つの発表を丁寧に見ることができ、充実した大会になったと思います。普段はあまり同じ口頭発表のセッションに入ることがない方々が、意図せずとも同じセッションに集まり、それぞれの話題を繰り広げ、議論を深める光景も興味深かったです。

最後に、猛暑の中、本大会の運営に携わってくださいました多くの方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

#### ◇ グルダイ学会大会「社会人・実務家」体験記

##### 小玉 一樹 (広島大学大学院社会科学部)



8月28日と29日に川越市の東京国際大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第57回大会に参加し、私は本学会で初めてポスター発表をさせていただきました。

今回の研究発表には、私自身にはちょっとした思い入れがあり、ポスター作成にも気を配り、私が勤務する会社の取引先に依頼して作成してもらいました。出来上がったポスターは、駅にでも張るような立派なポスターで、研究内容にそぐわないのではと思うほどでした。仕事柄、人と話す機会が多い私ですが、研究発表となると少し趣は異なります。私の研究内容を上手く説明ができ聞き手に正確に伝わるのか、自分の研究は他の先生方はどのような感想を持つのか、果たしてこの研究は意味のある研究なのか、などの不安を感じつつ、29日の発表に臨みました。

案ずるより生むが易し。ポスター発表では、私の研究に興味を持っていただいた諸先生方と有意義な意見交換ができ、研究への貴重なアドバイスもいただくことができました。この場を借りて、心からお礼申し上げます。口頭発表と違い、ポスター発表の良いところは、興味を持っていただいた方々の反応がダイレクトに伝わってくるということだと思います。次回も発表できるよう研究を継続し、さらに内容を深めていきたいと考えています。

学会期間中には、参加された先生方の最新の研究発表をお聞きすることで、私自身の研究との共通点や、新たな視点を得ることができました。また、私は企業の人事部門に勤務する実務家として、本学会での研究発表には実践に役立つ研究が数多く、研究だけに終わらず如何に実践に貢献できるかという視点を意識することの必要性を痛感しました。今後は双方の視点を意識しながら、研究を進めていきたいと感じています。

#### ◇ グルダイ学会大会「初スタッフ」体験記

##### 小森めぐみ (一橋大学社会学部研究科博士後期課程)

2010年度のグループ・ダイナミックス学会は、官公庁のない方の霞ヶ関に位置する、東京国際大学で行われました。私は縁あって大会運営スタッフの一員として務めることになりました。といっても、私は前日の会場づくりから本格的に加わっただけの即席スタッフで、それまでの膨大な準備作業は他の運営委員の先生方や東京国際大学の院生の方々既に終わらせて下さっていました。

前日には、「これだけ準備ができていけるなら、当日は意外と楽にいけるんじゃないかなあ」と気楽にかまえてしまっていたのですが…数時間の後、その考えが甘かったことに気付かされました。いくら周到に用意をしていたとしても、当日の時間の流れは想像以上に速く、また予想外の出来事に対処する必要もでてきます。

私は受付を担当していたのですが、ここでは当日参加者が予想を上回ったことで、参加登録のためにできた長い列を前にして、対応に走り回ることになりました。他の受付スタッフのがんばりで何とか乗り切りましたが、それ以外でもバタバタしている内に、気がつくやうに学会は最終セッションで、片づけが始まりました。予想していたことではありますが、発表を見聞きする時間はほとんどなく、学会運営に特化した形での参加となりました。もう少し時間のやりくりを考えておけば…というのはあとの祭りです。

今回の学会で、自分の研究にコメントを頂いたり、他の先生方の研究について議論する機会はほとんどありませんでした。しかし、スタッフとして学会に携わったことで、学会という場がいかに貴重なのかということ、改めて実感できた気がいたします。受付で実感した参加する先生方の多さ、何度も見返したプログ



ラムから実感した発表の多様さ、そして各教室から漏れ聞こえてくるエネルギーあふれる発表や議論…。これらは自分の研究を進める上でも大きな刺激になりました。また、これまで私が学会を満喫できた裏には、過去の学会大会を運営して下さったスタッフの方たちのご尽力があったことにも改めて考えが及びました。次回からは私は学会に参加する側に戻りますが、その際にも運営の方への感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。

記録的な猛暑の中（学会両日とも最高気温は35度！）、学会にご参加頂いた皆様が実り多い2日間を過ごせたのであれば、スタッフの一人として大変うれしく思います。至らぬ点があったかもしれませんが、ご寛恕頂ければ幸いです。将来学会を開催して下さるスタッフの皆様、学会の盛況と、当日のハプニングが最小限に留まること、そしてお金の計算上の結果と実際の金額が一発で合う事を、心よりお祈りしております。

## ★★ 国際学会大会参加報告 ★★

### ☆☆ ICAP2010 参加報告 ☆☆

#### 三沢 良 （財）電力中央研究所



2010年7月11日から16日にオーストラリアのメルボルンで開催された第27回国際応用心理学会議に参加してきました。この時期のメルボルンは真冬にあたり、気温はさほど低くはならなかったものの、吹きつける風がとても冷たく、荷物が増えることを憂いながら持参したダウンジャケットが重宝したことが強く印象に残っています。

さて、今回の会議ではおよそ60カ国から研究者が集い、社会、教育、臨床、健康、産業・組織など応用心理学の広範な領域にわたり、講演やシンポジウム、ポスターを含め3,000件以上の研究発表が行われました。私は産業・組織領域で労働安全や組織の風土・文化に関連するテーマの発表を聴講しましたが、各国において労働人口

の高齢化や雇用形態の多様化などを背景に、多様な人材で構成される作業集団のマネジメント、技術伝承や価値の創造など、組織や集団のダイナミクスが関与する課題が普遍的であるという認識を新たにしました。また、研究発表の多くが産業現場において数千名規模の作業従事者を対象とした調査を行っていることに驚嘆しました。大学院生と思われる若い研究者の発表でも、大規模なサンプルに基づくデータを扱っていたことが印象的でした。研究資金を獲得した組織的な研究プロジェクトの成果だとしても、日本では若手の研究者がこうした大規模調査の成果報告をすることは少ないと思います。一方、解析手法として構造方程式モデリングが多く用いられていましたが、モデル構成の根拠や説明力が十分な発表も散見されました。単に現場でデータを収集するだけでなく、実務の制度・施策へ貢献しうる知見を生み出すことが“応用”心理学として必要であると、半ば自戒の念も込めて感じます。

私自身の発表は電子ポスター形式で行いました。事前にパワーポイントで作成したポスターを会場内のPC端末から閲覧してもらい、必要に応じてダウンロードや質疑等のメッセージ交換ができるシステムです。ポスター在籍責任時間にとらわれず、講演やシンポジウムの聴講に時間を充てられる点が画期的だと思います。しかし、残念ながら、実際の会場内では非常に影が薄く存在感がありません！せめてWebサイト閲覧用の端末と見分けがつくくらいの工夫は欲しかったです。ちなみに会議終了後、自分のポスターのダウンロード数を確認しましたが、その数は16件と微妙なものでした。論文の別刷り請求の問い合わせも数件いただきましたが、英文での業績がないために応えることができませんでした。研究成果を英語で口頭発表や論文として発信することの重要性が身に染みます。

余談として観光のことも少し記しておきます。あくまで業務の一貫として参加したため、ほとんど観光はできなかったのですが、それでも1日はメルボルンからバスでフィリップ島へ渡り、ペンギン・パレードを観てきました。世界最小のフェアリー・ペンギンが群れをなして海から巣まで行進する様子はとても可愛らしいものです。海岸で傘もささずに雨にうたれ、帰りのバス車内で激しい腹痛に見舞われたものの、それだけの価値はありました。また滞在の最終日の夜には、メルボルン市内とその周辺を一周するトラム・ディナーを楽しみました。地元の方々も記念日などによく利用されているようで、陽気な給仕の方々と家庭的な雰囲気の中、美味しい料理とワインを堪能できます。

次回のICAPは2014年にフランス、華の都パリでの開催です。きっと多くの研究者の皆さまにお会いできるもの

と期待しています。

### 藤村まこと (福岡女学院大学)

2010年7月にオーストラリアのメルボルンで開催されたICAP( International Congress of Applied Psychology)の第27回大会は、67カ国から約3400名の参加者が訪れたそうです。そのうちの一人だった私は、本大会は通算4回目の国際学会の参加となりました。最近では、修士課程の頃から国際学会に参加される方も増えており、多いとはいえない回数ですが、少ないながらも国際学会にはそれぞれに特徴があることを実感しています。今回の大会は、応用心理学という名称が示すように、現実場面での問題解決を意識した報告が多いように感じられました。研究領域は、産業・組織、教育、臨床、社会、文化など多岐にわたっており、私は自分自身の関心領域である組織心理学の報告を中心に参加してきました。その中で印象に残った報告は、再就職希望者を対象とした訓練プログラムの開発とその効果検証を扱うものです。その研究では、再就職のため訓練を受けている40歳以上の方を対象にプログラムを実施し、実験群と統制群とを比較して、目標設定や自己効力感などの心理変数、そして半年後と1年後の実際の再就職状況に及ぼす影響を検証していました。客観的データも含めたフィールドでの縦断調査は容易ではないと思いますが、今後の参考にしたいと思った報告です。



また、私自身は本学会において「他者経験からの学習」をテーマに発表を行いました。以前より、未経験の課題に対する自信の源泉は何か、ということを考える機会があったのですが、大学で職を得てここ数年、学生の様子を見てみると、自分自身の経験に加えて他者経験からの取り込みも未知の課題に対する準備を助け、個人の成長に寄与するのではないかと感じるようになりました。今回はその関心のもとに行った調査をポスターにて報告して参りました。ここで、本大会の特徴のひとつとしてポスター発表があります。本大会で行われていた「Electronic Posters」は、通常のポスター発表とは異なり、サーバー上にある発表資料を各自がパソコンを通して閲覧するというものでした。ポスターを印刷していく必要も、ポスターの横に立つ必要もなく、質問やアポイントなどの報告者との対話はEメールを使って行う仕組みです。私はこのシステムを積極的に活用することはできませんでしたが、大会参加者の方から聞いた話では、早々と発表者にメールを送り大会中に会う約束をするなど、この仕組みを活用していた方も多いようです。

最後に、メルボルンの文化や食事についてですが、私や友人たちは牡蠣とワインを堪能して参りました。その際、美味しいお店を見分けるというすどい嗅覚をお持ちの先生方には大変助けられました。いつもであれば美術館や劇場などの観光地にも足を運びますが、メルボルンでは美味しい牡蠣とワインが低価格で楽しめるといふ素晴らしい事にすっかり「食」に偏った日々を過ごしてしまいました。それでも、メルボルンの街並みやマーケットでの買い物、ユーレカ・スカイデッキからの夜景を楽しむことができ良い思い出ができました。次回のICAP第28回大会は、2014年7月8日から13日にかけてフランスのパリで開催されるそうです。今から2年後が楽しみです。

---

## ★★ 社会心理学者かくつぶやけり：ツイッターに関する論考 ★★

---

### 第2回 研究者としての観点からツイッターを眺める

三浦 麻子 (関西学院大学)

【前回要約：近頃流行のCMCメディア「ツイッター(Twitter)」について、基本的なしくみを解説し、ユーザにとってどんな場かを個人的視点で考察した。筆者にとってツイッターは、同業者たちが「つぶやき」を介して「集う」互酬的コミュニティであり、究極のグローカリゼーションツールである。】

上掲要約【】内がちょうど140字。ツイッターにおける1ツイートの最大字数である。前回記事の掲載が7月末だが、その後ツイッターに手を染めたGD会員の方も多かるう。2010年10月の日本の総ツイート数は3億2900万件に達しているそうだ。ツイッターは既に一定以上の成功を収めたCMCであり、ホームページ、ブログを凌ぐほどの情報発



信ツールとなっている。

ツイッターに限らず多くのCMCが対面や電話によるコミュニケーションと大きく異なるのは、コミュニケーションそのものがタイプされた文字によって構成されており、発生したその場で可視化される（つまりログが残る）ことであり、研究者にとってまことに都合のよい形態をしている。そしてことにツイッターは、従来CMCツール以上に、特に加工しなくとも分析に十分耐えるだけの形のコミュニケーションログを自動的に生成してくれるデータの宝庫のようなものである。

例えば、ツイッターのログを見ればある個人のライフ・ダイナミクスが推定できる。図1は@asarin（つまり私）というユーザがこれまでにツイッターにどの程度どのような投稿をしたか（ツイート/リプライ/RT）を1日24時間の時系列データとして集計したもの(Twitter Charts; <http://www.xefer.com/twitter/> による)である。曜日・時間帯ごとの投稿の多寡から、@asarinは①早寝早起き、②金曜日の日中は暇、③土日の日中は遊びほうけている、という生活パターンが見えるようである。ここで重要なのは、ツイッターではしくみとユーザの双方のリアルタイム性が高いため、「つぶやく」ことはもちろん「つぶやいていない」こともそのユーザを知るのに有用な情報たり得ていることである。つまり「情報を発信しない」という情報も「発信される」メディアであるというわけだ。さらに、GPS機能付きの端末から不用意にツイートすると現在地までさらすことにもなる。研究者にとってデータの宝庫であるということは、それだけユーザの情報が「ダダ漏れ」であるということに等しい。ユーザ単位の分析のみならず、ツイート内容（やそこに含まれるキーワード）単位の分析もまた容易である。簡便な分析ならば既存のサービスを使うこともできる。

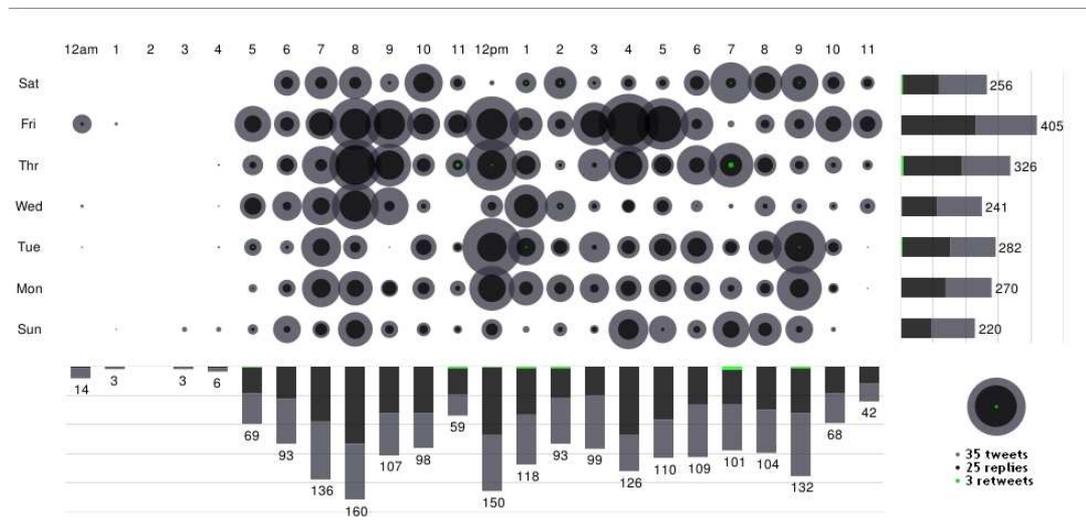


図1 Tweet 投稿の時系列解析 Twitter Charts

ツイッターのコミュニケーションをグループ・ダイナミクスの観点から眺めるのもまた興味深い。ツイッター上で熱い議論が交わされることはよくある（私自身は不得手だが、GD会員にも好きな方はたくさんいる）。同期的なCMCでよく生じる話題の輻輳はコミュニケーションを阻害する主たる要因で、ツイッターもそのしくみ上その影響を免れないが、リプライやハッシュタグをうまく使うことで、ユーザレベルでのコントロールはある程度可能である。しかしそれでもさすがに特定のテーマに関する議論を事後に読み返すのは認知的負荷が高い。そんな際は、トゥギャッター (<http://together.com/>) というサービスを使えば、議論に関わるツイートのみをラップアップできる（これを「トゥギャる」と称する）。例えば「グループ・ダイナミクスや社会心理学の教え方についてのワークショップ記録」(<http://together.com/li/45497>)は、今年度のGD大会で開催されたWS「我々は、グループ・ダイナミクスや社会心理学をどのように教えていけばよいのか—暗中模索の若手教員の議論—」(<http://www2.ocn.ne.jp/~kaichiro/GDWS/GDWS.htm>)について、会場で聴講していた私の実況ツイート（もちろん企画者の許可を得ておこなった）を@Manyacesさんというユーザがトゥギャったものである。ここにはたまたま@asarinのツイートしか含まれていないが、公開されているツイートならば誰でも誰のものでもトゥギャることができるし、直感的なユーザインタフェースなので手続きは非常に容易である。これに限らず、ユーザたちの利用形態（の変化）に応じて、次々とそれを支える副次的なしくみがユーザたちによって作られていく。こうしたツールは運営会社が公開しているWebAPI(Ap

plication Programming Interface)を利用して作成されており、UNIX OSや統計解析ソフトRなどのそれとよく似た、ユーザを積極的に巻き込むソフトウェア開発コミュニティにおけるダイナミックスというのも興味深い。

また、ツイッターが成功を収めている現状には、他のCMCよりコミュニケーションが「盛り上がる」一方で「荒れにくい」ことをユーザが体感していることが大きく関わっていると考えられる。非公式RTの際に元発言を改ざんするなど典型的な「炎上」のきっかけからトラブルが発生するケースもままあると仄聞するが、それを実際に目にするのは他のCMCに比べると少ない。これは私のフォロワーが穏健かつスキルフルなユーザ揃いであることも影響しているのだろうが、ツイッターのしくみも深く関わっている。ブログのコメント欄や電子掲示板では、多くの個人がある特定のコミュニケーションの場を共有する（同じページを閲覧する）ため、「炎上」のきっかけとなりそうな投稿はかれらの共有知識となる。一方ツイッターでは、あるツイートは当該ツイートの受け手と投稿者とかれらに共通するフォロワーにしか届かない。この情報伝達構造の根本的な違いは、前者では煽りへの同調を生じやすくさせる一方で、後者では尻馬に乗るユーザが登場しにくいというコミュニケーションの差異をもたらす。さらに、ID制による匿名性の低さも、この差異に拍車を掛けている。総じてこれらがユーザにとっての「居心地のよさ」を形成しているのではないだろうか。

あれこれと考察してきたが、私自身はまだこのデータの宝庫に手をつけられておらず、単なる1ユーザの位置にとどまっている。一方先頃、東京大学文学部社会心理学専修課程（池田謙一研究室）4年生の渡辺泰生さんによって、ツイッターの利用傾向とコミュニケーションに対する考え方に関する調査(<http://pop-popcorn.sakura.ne.jp/report/top.php?p=1>)が実施された。このニュースレターが皆さんのお手元に届く頃には、分析結果がまとまりつつあるのではないだろうか。ツイッター利用者を対象とした実証的研究の成果に大いに期待している。

### ★★ 常任理事会からのお知らせとお願い ★★

#### ◆2011年度アジア社会心理学会発表支援制度補助対象者募集のお知らせ

日本グループ・ダイナミックス学会は、アジア社会心理学会との交流・連携を促進するために、日本国外で開催されるアジア社会心理学会で発表される、本学会所属の若手研究者による優れた研究に対して渡航経費の一部を補助する制度を設けています。応募資格、募集の条件、発表者の義務等は下記のとおりですので、該当する会員の皆さんは、奮って応募してください。

#### 応募資格

本学会に所属し下記のいずれかに該当する者。いずれも年齢は問わない。ただし、出願締め切り時点で、日本学術振興会特別研究員に採用されている、もしくは採用が内定しているものは応募資格を持たない。

- 1) 正規の学籍を持つ大学院生。
- 2) 大学院博士後期課程入学後6年未満で、社会心理学の研究・教育に携わる者。

#### 出願締切

2011年4月5日（必着）までに、下記の住所に願書と必要書類を送付すること。

#### 送付先

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル  
 中西印刷株式会社 学会部内  
 日本グループ・ダイナミックス学会事務支局

#### 補助対象者の決定

2011年6月中旬までに、本人宛に通知する。

## 提出書類

日本グループ・ダイナミックス学会が定める応募用紙。  
 応募用紙は、学会HPからダウンロードしてください。

## ★★ 事務局からのお知らせとお願い ★★

## ◆ 日本グループ・ダイナミックス学会 第57回大会総会成立について

去る2010/08/28に開催された第57回大会総会は、総会出席者数が正会員の過半数に達しなかったため、規程により「仮総会」となりました。仮総会の場合、「その決議事項を全会員に通報し、その後1月以内に会員総数の過半数が文書によってこれに反対しないときは総会の決議としての効力を発するものとする」ことが定められております（学会会則細則第11条）。そこで、2010/11/12付けで総会の議事録・資料を全会員に送付させていただきました。

2010/12/12までに、会員総数の過半数の方からこれに反対する文書を事務局は受け取りませんでしたので、規程に基づき、仮総会の決議内容が承認されたことになりました。ご報告申し上げます。

## ◆ 年会費納入のお願い

2010年度年会費については、多くの会員の皆様にすでに納入いただいておりますが、11月末の時点で、未納の会員の方が少なからずおられます。会員の皆様からの年会費の納入が学会運営の基盤となっております。まだの方は、お早めに納入いただきますようお願い申し上げます。なお、振り込み状況などが不明な方は、事務支局にお問い合わせください。

## ◆ 日本グループ・ダイナミックス学会 第58回大会について

以下の予定で開催予定です。多くの会員のご参加をお待ちしております。

会期 : 2011年8月23日(火)–24日(水)

会場 : 昭和女子大学人間社会学部 (東京都世田谷区太子堂1-7)

大会準備委員長: 今城周造先生 (昭和女子大学)

連絡先: 日本グループ・ダイナミックス学会第58回大会準備委員会  
 (昭和女子大学人間社会学部心理学科内)

Tel : 03-3411-5094

Fax : 03-3411-5094

E-mail : gr58@swu.ac.jp

URL : <http://aso.swu.ac.jp/gr58/index.html> (開設まで今しばらくお待ちください)

## ◆ 実験社会心理学研究、教育・社会心理学研究全巻全号アーカイブ化完了のお知らせ

昨年度より、JSTと進めてきました、実験社会心理学研究（および前身誌の教育・社会心理学研究）の全巻全号のアーカイブ化が完了しました。学会HPの機関誌のページよりご覧いただけます。これまで図書館の書庫でしか確認できなかった学会初期の貴重な資料もごございます。是非一度ご覧ください。

URL : [http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/jnltop\\_ja.php?cdjournal=jjesp1971](http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/jnltop_ja.php?cdjournal=jjesp1971)

## ◆ 日本グループ・ダイナミックス学会第57回大会からのお知らせ

## 1. 発表数: 92

〈内訳〉

- ・ロングスピーチ: 3
- ・English Session: 5
- ・ショートスピーチ: 27
- ・ポスター: 53

- ・ワークショップ 3
- ・シンポジウム 1

## 2. 発表取り消し：1

P1-4 (大会論文集p.88-89.)

中山間地の災害復興に関する長期的現場研究 小千谷市塩谷集落の5年 (2)

大阪大学大学院人間科学研究科

渥美 公秀

### ◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミクスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書 (A4版1-2枚程度) を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。URLは、[http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event\\_info.html](http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event_info.html)です。ご参照ください。

なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

### ◆実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

## ☆☆ 広報担当からのお知らせ ☆☆

◆JGDA\_Flash：グルダイでは【日本グループ・ダイナミクス学会 広報 (速報) メールマガジン】 (JGDA\_Flash)を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約600名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思います。登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターにお願いいたします。

[office@groupdynamics.gr.jp](mailto:office@groupdynamics.gr.jp)

◆会員の皆様がお書きになった新著を、400字程度でご推薦いただき、上記までメールにて随時ご送付いただきたいと思います。なお、ご推薦の文書はなるべく著者でない方に書いていただき、ご著書に関する出版社等の情報とともに、その推薦の方のお名前とご所属などもお書きくださいますようお願いいたします。これまでに掲載された記事は以下のWEBで閲覧できます。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/bookreview/index.html>

◆研究会案内等についてのニュース記事の掲載希望も大歓迎で受けつけています。上記のアドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、以下のWEBで閲覧可能です。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs2.cgi>

---

## ☆☆ グルダイ学会関係連絡先 ☆☆

---

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌・ニュースレターの未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌・ニュースレターの未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆【事務支局】住所・所属変更、その他お問い合わせは

中西印刷株式会社 学会部 (日本グループ・ダイナミックス学会担当：中山・糸魚川)  
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル  
TEL: 075-415-3661 FAX: 075-415-3662 e-mail: jgda@nacos.com

◆学会運営・対外業務関連は

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局  
〒739-2695 広島県東広島市黒瀬学園台555-36  
広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 西村太志研究室  
E-mail: sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

日本グループ・ダイナミックス学会編集事務局  
〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-19-1  
九州大学大学院人間環境学研究院 人間科学部門心理学講座 山口裕幸研究室  
E-mail: jjesp\_ed@hes.kyushu-u.ac.jp

◆ぐるだいのニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報などは

静岡県立大学看護学部 西田公昭研究室  
〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1  
TEL: 054-264-5486 Fax: 054-264-5099 (大学事務局)  
E-mail: office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。  
また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

◎ (編集後記) 寒さが身にしみます。でも、教え子の卒論を修正していると、その寒さもどこへやら。自分が見落としていた多くの研究知見や考え方を見直し、体と頭に血が(いい意味で)めぐり、新たな研究計画を紡ぐ日々です(カラマワリ古谷)。AKB48を見つつこれを仕上げています。その元気にウラヤマシスを感じております。しかしお陰をもちまして、これでミッション終了です、次の担当の方に幸多きことを!ごきげんよう。(コウネンキ西田)

---